

## リア王の大衆性 I

大橋進一郎

### 序

Shakespeare 劇はエリザベス朝演劇を代表するばかりでなく、四世紀経った今日でも世界中で上演される息の長い作品である。特にいわゆる四大悲劇は未曾有の名作といわれ、なかでも *King Lear* はシェイクスピアの創作力の最高峰を示すものとして、惜しみなき称賛を浴びている。勿論反対意見もある。例えばトルストイは「この劇が昔は一部の観客に受けたにせよ極めて出来の悪い杜撰な作品で、現代人には退屈きわまりない醜悪な作品である」とまで酷評した<sup>1)</sup>。一方「リア王」の芸術性を高く評価する批評家たちも、これが現実の舞台にかけうる作品かどうかという点になると、疑問を挟む者が少なくない。C. ラムは「安っぽい機械仕掛けで荒野の嵐を表現することは不可能だ」と言い、A. C. ブラッドリーは「リア王」があまりにも規模が雄大で内容が多様性に豊んでいるため、本で読んでも真の理解がむつかしく、ましてや現実の舞台ではどう表現するのか、という危惧の念を抱いた。

トルストイの非難を持ち出すまでもなく、この作品には不自然な所がかなりある。名君であった筈の Lear が隠居を決意した途端に暗愚な暴君になり、一番可愛いがっていた末娘 Cordelia を勘当するプロットには無理があるし、悪役にされたとはいえ Goneril や Regan の言い分の方がリアより筋が通っているので、世の中が合理主義一辺倒に傾けば加害者と被害者の立場が逆転しかねない危険性を孕んでいる。また、リアと道化の会話が悪巫山戯に見えるというのも当然かも知れない。しかし後世から見てこのような非難が生まれるところに、この芝居が当時の観客を喜ばせた秘密が潜んでいるのではなからうか。

もう一つの疑問、すなわち立派な作品であるにも拘わらず上演不能という意見は、始めから上演を前提としない読ませる作品として書かれたことを示唆するが、これも当時の演劇環境について考えてみる必要がある。つまり、十六世紀後半から十七世紀初頭に至るロンドンの実情を常に頭に描いておかないと、判断出来ない問題なのだ。

一方、絶賛を惜しまない側は、不幸のどん底に落ちた者でも虚飾をかなぐり捨てたとき真の人間性に目覚め、やがて哲学的世界観・宇宙観に目を開くに至るその過程描写の見事に注目す

る。確かにこれは時代を超越した人類永遠のテーマであろう。勿論この讃辞に異存はない。しかし、人類永遠のテーマはこういった哲学的啓示にのみ存在するのではなく、この芝居のもつ大衆性にもふんだんに盛り込まれている。

シェイクスピアがどのような人生観を持っていたかは永遠の謎である。しかし、仮りに哲学的に極めて高尚な理想の実現を夢見ていたとしても、自分の作品をその手段に使ったかどうかは疑問である。後世の観客はともかくとして、当時の観客がそのような啓蒙的演劇を望んでいたとは到底思えない。客観的に見て言えることは、彼が観客に受ける芝居を書こうとしていたということだけであり、これが本推論の原点である。

残念ながら、この稀れに見る天才の創作態度を窺わせるような日記、手紙その他の文献は殆んど残っていない。従って、限られた資料から推測する以外に術はないが、それでも諸先達が残してくれた研究成果により、この劇作の舞台裏を推理してみることは可能だと思う。

## 1

まず当時の劇団史を展望してみよう。イギリス演劇が中世の *miracle play*, *mystery*, *morality* などから脱皮したのはルネッサンス期に入ってからのことである。悲劇は十六世紀後半になって Thomas Norton と Thomas Sackville の合作になる *Gorboduc* が最初だといわれる。当時の劇団は社会的地位が低く<sup>2)</sup>、常設館を持たぬ旅回り一座であった。やがて Thomas Kyd や Christopher Marlowe その他の *university wits* の活躍により、その地位も次第に向上して行った。最初の常設館は 1576 年に開業した Shoreditch の The Theatre (シアター座) である。シェイクスピアは多分 Queen's Men (女王一座) にでも雇われたのであろうが、その時期もまた何をしていたのかも判っていない。しかし脚本を書くようになり、1592 年までに *Henry VI* (三部作) を完成していたことは間違いないし、すでにかかなりの評価を受けていた<sup>3)</sup>。

1592 年夏ペストが猛威を振ると劇場は閉鎖され、劇団は旅に出た。ロンドンの演劇界は事実上潰滅した。劇場が再開されたのは 1594 年の秋である。この時シェイクスピアは Lord Chamberlain's Company (宮内大臣一座)<sup>4)</sup> に参加していた。

その頃演劇界の主導権はこの宮内大臣一座と Lord Admiral's Company (海軍大臣一座) が争っていた。この年のクリスマスはどちらも宮廷で二回上演を行ったが、1596 年には前者が六回の上演を独占するという圧勝に終わった。しかし、彼らの競争はその後続く。宮内大臣一座のパトロンであったハンズドン卿が死ぬと、後任のコバム卿は演劇に理解を示さず、ロンドン市当局の要請に応え、枢密院と図って市内の宿屋劇場を閉鎖してしまった。宮内大臣一座は本拠をシアター座と The Curtain (カーテン座) に置いていたが、市心からかなり遠い所にあつたので、冬場の公演には市内の宿屋劇場を利用していた。だから、この処置は痛手であった。とりあえず

冬場はThe Swan（白鳥座）を借りたりして急場を凌いだり、1598年12月シアター座を解体してその古材を運び、強引にも海軍大臣一座の本拠地 The Rose（バラ座）の真向いに The Globe（地球座）を建てた。これに対し、海軍大臣一座は1601年テムズ河を越え北フィンズベリに建設した The Fortune（運命座）に移った。

この罅迫り合いとは別に、宮内大臣一座にとって新しい脅威が出現していた。新興の少年劇団——St. Paul's と Chapel Royal である<sup>5)</sup>。そのような折、Elizabeth I が薨去した（1603）。新国王 James I は術学的な人物で芸能を愛し、シェイクスピアたちにも庇護を与え、宮内大臣一座は King's Men（国王一座）に組織が変わった。このことにより一座の台所はかなり潤ったようだが、疫病のため劇場が約一年間閉鎖されるという事態が生じ、一座は旅に出た。大雑把ではあるが、以上が「リア王」初演前のロンドンにおける劇壇の実情である。

## 2

次にシェイクスピアの創作意欲について探してみたい。この芝居を書いた頃彼は既に劇壇の重鎮であったし、相当な数のファンを持っていた。しかし当時の演劇人は今日と較べ遙かに社会的地位が低く、また彼らを取り巻く環境も甚だ微妙なものがあり、絶えず危険が伴っていた。そのような立場の中でシェイクスピアは激動する世の荒波を巧みに泳ぎわたり、興業的に成功を収め、かなりの利益を上げていた。だから「リア王」を書いたのも世の常識に逆らわず、人口に膾炙する芝居を目指してのことだった、と考えるのが自然であろう。これは彼の他の作品についても言える。でも、ただ大衆受けのする芝居ばかり書いていたら、今日のシェイクスピア評は存在しなかったであろう。

エリザベス朝演劇の実態を知る上で貴重な資料の一つに *Henslowe's Diary*<sup>6)</sup>（1592～1602）がある。ちなみにシェイクスピアが世の注目を浴び始めたのは1592年（28歳）からだが、劇場史が明らかになるのもこの年からで、それ以前例えば1560年から90年までの三十年間に書かれたイギリス演劇の脚本で、現在残っているのは半ダースにも満たない<sup>7)</sup>。

さてこの日記によると、シェイクスピアは1593年 *Venus and Adonis*、1594年 *The Rape of Lucrece* をそれぞれ出版した。彼は宮内大臣一座の役者兼座付作家であった。それ以後彼の劇団人としての活躍は、劇場史と共にかなりはっきりしてくる。

ここで留意しなければいけないのは当時の脚本の性格で、今日の常識とは少し違っていた。つまりフリーの脚本家が自分の作品を劇団に売り込むばかりでなく、出版して世にその真価を問うという時代ではなかった。当時の座付作家の脚本は一座の企業秘密であった。劇団は好評の芝居の脚本が外部に洩れることを極度に恐れていた。何しろ出版の歴史は浅く、著作権もまだ今日のように確立されておらず、海賊版が横行していた時代である。しかし、上演を通じ作品の内容が世

間に知れ渡っていくと、やがて脚本が「読まれる」商品になり、出版界の新しい市場に成長していった<sup>82</sup>。従って、シェイクスピアには上演と出版という二つの目的を選択する可能性がなかった訳ではないが、座付作家としてあくまで上演を目指していたと考えるべきであろう。

この辺の事情を推理するため、舞台を日本に移して考えてみたい。丁度同じ頃、出雲阿国の「かぶき踊り」が世の喝采を浴び、歌舞伎が誕生、やがて歌と踊りを中心とする所作事から筋を持つ芝居へと発展して行った。中村勘三郎が寛永元年（1624）始めて江戸に猿若座を造ってから幾つかの常設館が現われ、芝居は大衆の間に根を下ろし、元禄時代になると江戸の市川団十郎と大阪の坂田藤十郎が天下の人気を二分した。

その頃まで、脚本は主として役者自身の手になるものであった。やがて近松門左衛門が武士を捨て藤十郎のために脚本を書くようになって、始めて専門の戯曲作家が生まれた。しかし、近松は役者に合わせて脚本を書かねばならなかった。彼の芸術意欲はそのような制約内では満足を見出せなかった。彼は活路を浄瑠璃に求めた。折しも徳川三百年の封建制度がやっと軌道にのり、世は身分の差を強調することにより秩序を維持する方向に傾いていた。自然の倫理と支配者の作る道徳律の間で、義理と人情の板挟みになったひとびとの身に起る悲劇的な事件が近松文学に格好の材料を提供した。こうした現実の出来事を巧みに盛り込んだ近松の台本は、竹本義太夫が演ずる入魂の人形芝居で民衆の心を捉えた。

このように見てくると、芝居の場合劇作家の目指す文学的価値にとって、一座という存在は初めは表現手段としての武器であったのが、やがて制約という足枷になってしまう、という現象に気がつく。つまり作家の腕が上がれば上がるほど、一座の役者や舞台装置が作家の活動範囲を狭めることになる。このような見方に客観性もしくは普遍妥当性があるかないかは別として、少なくとも文学指向の劇作家はそう考えるであろう。ここに彼らの悩みがあり、この壁を乗り越えてこそ後世に残る名作が生まれるのである。

このことはシェイクスピアにも言えると思う。但し彼の場合浄瑠璃ではなく、詩に活路を求めた。1593年から1594年にかけて、先に述べた二つの詩の外に *Sonnets* を書いた。だが、それ以降詩作はしていない。この事実は何ら内心の葛藤を示唆するものではないが、結果としてシェイクスピアの創作意欲が近松のように読ませる作品には進まず、あくまで上演を目的とした劇作に向ったことを物語っている。だから、彼の脚本は後世に見られるような読ませるために書かれたものでは決してない。「リア王」も現実に国王一座に属する役者に地球座で上演させようとして書き上げ、始めからリアは Richard Burbage、道化は Robert Armin という風に配役も決っていた。そして上演は成功した。

では、何が「リア王」を成功させたのか考えてみたい。勿論役者たちの熱演に負うところが大きかったのであろうが、劇評というものが全く残っていない以上、この角度から調べることは不可能に近い。また、シェイクスピアの文章が素晴らしいものであることに今更議論の余地はない。

欽定訳聖書と並び近代英語前期を築くものとして、すでに英語史に不滅の金字塔を残している。でも、それだけでは客を呼べない。

近松の歌舞伎や浄瑠璃がひとびとの心を捉えたのは、近松の描く世界を支配する不条理な道徳律が生み出す悲劇に観衆の共感を呼ぶ何かがあったからだ。シェイクスピアも現実の出来事をふんだんに取り入れながら、誰にも関心のある人生の諸問題を描こうとしたのではなかろうか。この見地から作品を展望してみたい。

### 3

「リア王」がいつ書かれたか、正確には判っていない。最も早い推定は1603年だが、記録によれば宮廷上演が1606年12月26日、作品登録 (Stationer's Register) が1607年11月26日である。しかし、いつ書かれたのかという点では、諸説の間に数年のずれがある。その中有力と思われる仮説を拾ってみると、シェイクスピアが下敷にしたと思われる *King Leir and his Three Daughters* (1594年上演) が悲劇ではないのに1605年5月8日に再登録・出版された際「悲劇」と銘打ち、本の扉にも「最近しばしば上演され……」としてあることから、シェイクスピアの「リア王」は1605年すでに上演され、好評を博していたと推測する。つまり「原リア」の出版社がシェイクスピアの人気を利用したため生じた矛盾である、という謎解きに立脚して1605年以前という時期を割り出した<sup>9)</sup>。

これに対し作品の内容から検討すると、1606年春から書き始め年末までに脱稿したとすると足る証拠があるという説がある<sup>10)</sup>。これはまず乞食に扮した Edgar の科白を論拠としている。

five fiends have been in poor Tom at once; of lust, as Obdicut; Hobbididance, prince of dumbness; Mahu, of stealing; Modo, of murder; Flibbertigibbet, of mopping and mowing, who since possesses chambermaids and waiting-women.  
(IV, i, 61~6)

ここに出てくる奇妙な名前は1603年の始めに出版された Samuel Harsnet: *A Declaration of Egregious Popish Impostures* という本から取ったものである。次に Earl of Gloucester が Edmund に語った「日蝕や月蝕が不吉な前兆」という話<sup>11)</sup> とその後でエドモンドがエドガーにこの話を皮相的に繰り返すくだり<sup>12)</sup> は *Strange, fearful and true news which happened at Carlstadt in the Kingdom of Croatia* という小冊子から取材したものだ。この小冊子の序言の日付は1602年2月11日となっている。また1603年の史上空前といわれた暴風は第五幕の嵐の場面を髣髴させる<sup>13)</sup>。更にドーヴァの崖の場面<sup>14)</sup> はシェイクスピアの一座が1606年ドーヴァを訪れた時、実際に観察したものだろう。最後に、リアが狂気に陥りエドガーの扮する乞食に言う科白  
First let me talk with this philosopher.

What is the cause of thunder ?

(III, iv, 159~60)

も11月に Surrey の Bletchingley にある教会が落雷により炎上した話を書いた Rev. Simon Harward: *A Discourse of Lightning* という本が評判になっていたので、芝居がこのくだりに及ぶと宮廷劇場は爆笑の渦に巻き込まれたことだろう、と結んでいる。

すると、先に紹介した1605年春にはすでに上演されていたに違いないとする仮説との間に、約一年半のずれが生ずる。おそらくシェイクスピアは「リア王」を最初書き上げ市中で公演してから宮廷上演までの間に手を加え、その間に起った手頃な話題を巧みに取り入れて行ったのであろう。だから最初の原稿は First Quarto (1608) や First Folio (1623) とは大分違ったものではなかったろうか。そう考えるとすべて辻褃が合う。

いずれにせよ、シェイクスピアが脚本に当時の話題をふんだんに盛り込んでいたことは間違いあるまい。「リア王」は古代を舞台にした劇のように見えるが、それはあくまで形式的枠組みであり、内容はエリザベス朝末期からステューアト朝にかけての時代背景を踏まえて理解さるべきものである。

#### 4

第1章及び第2章で述べた状況のもとで、シェイクスピアが何か新しい劇を作ろうと模索していたことは容易に想像出来る。Ben Jonson はジェームズ一世の王妃が派手好みなのに目をつけ Masque を単なる所作事から華麗なショーにまで進歩させていた。新しい劇作家たち George Chapman, John Marston, Thomas Dekker なども着実に力をつけてきた。シェイクスピアは少年劇団に劣らず大衆受けがしてしかも芸術性の高い作品を書いた。すなわち *Hamlet*, *Othello*, *Macbeth* などの悲劇である。そしてその絶頂を極めたのが「リア王」だといえる。ではこの作品が前三作とどう違うのか、まず大衆性から見て行こう。

この時代には善悪の基準として nature という概念があった。natural なことが善であり、unnatural が悪である。この言葉はシェイクスピアの作品を理解するための重要な key word とされているが、これと密接な関係のある time という単語も鍵と見なされる。

And nothing 'gainst Time's scythe can make defence

Save breed to brave him, when he takes thee hence.<sup>15)</sup>

シェイクスピアは老醜を恐れていた。暴虐無情な「時」の猛威の前に人間は全く無力なのだ。しかし「自然」の再生が人に生きる希望を与える。この永却輪廻の営みが「自然」の摂理であり、その中でのみ人は幸福に暮らせる。ところが unnatural な要素によりこの循環が断ち切られると、そこに悲劇が生まれる。シェイクスピアはこの外的要素と人間の——特に優れた人間の——孤独感という内的要素を結びつけ、悲劇をものにしてきた。

Here it must be enough to say that, from Richard III to Hamlet, Othello, Macbeth, Lear and Coriolanus, all the tragic heroes he depicts are lonely men, condemned to solitude by some passion or obsession that makes it impossible for them to communicate freely with the rest of mankind—Hamlet by his habitual irresolution, to which he adds a sense of wasted strength; Othello, by his obsessive sexual jealousy; Macbeth, by an accumulating load of guilt; Lear and Coriolanus, by their obstinacy and self-destructive pride. For each, his solitude at length becomes a prison; each is destined to die alone, as the whole structure of his previous life collapses.<sup>16)</sup>

しかしリアの場合、前の三者といささか趣を異にする。ハムレットは叔父による父の謀殺という犯罪が事前に存在したし、オセロはイアーゴという悪人の奸計に嵌った。マクベスは一步進めて自分が悪役になる。そしてリアの場合、少なくとも初めには誰も悪巧みをめぐらせていなかった。この芝居で最も悪知恵を働かすのは脇筋のエドマンドで、人間の欲望がどんどん膨らんで行く様を見事に描き出しているが、リアの悲劇とは本質的に無関係である。

リアは恵まれた環境の中で幸せに天寿を全うしようとしていた。だが、気楽な余生を送ろうとしたことに災いの種があった。すると、この悲劇の元凶は time ということになる。

ここで、リアの激情が不自然であるという後世の批評について考えてみよう。確かにコーディーリアに対する彼の激怒ぶりは一見不自然に見える。だが八十歳になろうという彼の年齢を考えれば、これは決して有り得ないことではない。老年痴呆の現象として捉えれば容易に理解出来るであろう。医学的には老年痴呆と脳血管障害痴呆が考えられるが、シェイクスピアは医学を修めたわけではないので、そのような専門知識はなかつただろう。また、当時の医学では単に耄碌として片付けてしまう問題だったかも知れないが、人生末期における深刻なテーマであることには変わりない。今日、老年人口に占める痴呆患者の割合は七十歳代で2～6%、八十歳以上で13～22%といわれる<sup>17)</sup>。エリザベス朝でも当然厄介な、しかもありふれた、問題であった筈だ。痴呆老人を抱える家族の困惑とこれから老齢期に入ろうとするひとびとが抱く漠然とした恐怖感は、今も昔も変わらない。

エリザベス一世の晩年にこの脳の老化現象が見られる。女王の名付け子にあたるジョン・ハリントンなる詩人は「女王は自分が召しておきながら、そのひとびとが伺候すると、怒って退けた。なんのために呼んだのか、女王は忘れていたのである」と書き残している<sup>18)</sup>。この一事を以って、エリザベスの晩年に老人性痴呆症が見受けられ、それが周知の事実となってシェイクスピアがリア王のモデルにしたと断定するつもりはないが、世継ぎ問題を最後まで曖昧にしておいた女王の言動に国民がかなりの関心を寄せていた、と考えるのはそれほど無理なことではない。伝聞に基く憶測が噂を呼ぶことも大いにあり得ることなので、当時女王耄碌説はかなり広まってい

たのではなからうか。

1600年代になるとスコットランド王ジェイムズ六世が後継者として最有力になり、貴族やジェントリーは新しい勢力に近づこうと腐心していたようである。女王が最も信頼していた William Cecil, Baron of Burghley でさえジェイムズを支持し、彼への献身を誓ったくらいだから、人心は日に日に老エリザベスから離れていった。1603年1月、エリザベスは宮廷を Richmond に移したが、間もなく従姉妹であり心の友であった Earl of Nottingham 夫人が死去するとすっかり意気消沈し、衰弱の度を早め、三月には自らも鬼籍に入った。

エリザベスの晩年にはリアと共通なものが二つある。一つは老齢からくる耄碌、もう一つは実質的に権力の座を降りた者が味わう悲哀である。これが歴史的に事実であったかどうかは問題ではない。少なくとも一般大衆の目にはそう映った。このことがシェイクスピアにヒントを与えたのではなからうか。仮にそうだとしても、彼は用心したに違いない。崩御したばかりの女王をモデルにして悲劇を書くのは危険なことだ。ジョンソンは筆禍事件で何度か投獄されているし<sup>19)</sup>、宮内大臣一座も1601年2月8日の Essex 伯の反乱の際、蜂起の前日 *Richard II* を上演したことで、危うく当局から糾弾されるところだった。

ところで、シェイクスピアが「リア王」の下敷に使ったといわれる「原リア」は1594年に上演されたきりになっていた。シェイクスピアは実際にこの芝居を見たか、あるいは台本を手に入れたかして、その筋を知っていた。そしてエリザベス崩御の頃の時代背景を反映して書き直した、と推定することは可能であろう。この書き直しに当り作者に影響を与えたと思われるものは外にも Holinshed: *Chronicles*, Spenser: *Faerie Queene*,<sup>20)</sup> Sidney: *Arcadia* などが挙げられ、更にヒギンス「君主のための鏡」ハースネット「宣言」モンテーニュ「随想録<sup>21)</sup>」なども考えられる。

エリザベス朝を通じ、国民的関心事の底流をなすものは宗教問題と経済問題であった。Henry VIIIの宗教改革以来、イギリス国教徒、カトリック、プロテスタント（特に清教徒）の綾なす関係は複雑を極めているが、まず国際的に考察してみよう。

この時代にイギリスが経験した戦争は二度あった。まずエリザベスの姉 Mary I が夫である後のスペイン国王フェリペ二世に唆かされて始めた対フランス戦争（1557～9）がある。これは敗戦に終り、大陸における唯一の根拠地カレーを失った。当時のスコットランドはフランスの属領のようなものであったから、これでフランスはイギリスの前後を制した形になり、イギリス側から見れば国家存亡の危機が迫っていた。ところが、間もなくフランス王アンリ二世が死にフランスが弱体化したので、エリザベスは虎口を逃れた。しかし、今度はスペインとの関係が悪化した。従来からイギリス毛織物工業の圧迫により、スペインの基幹産業である毛織物工業は衰退の一路を辿っていたが、更にイギリスの私拿捕船がアメリカのスペイン植民地と密貿易を行ったり海賊を働いたりして、スペイン人を怒らせていた。一方スペインはカルロス一世が1519年カール一世としてドイツ皇帝を兼ねたことからヨーロッパ最大の国家になり、ローマ教皇を圧力下に置



くまでに至った<sup>22)</sup>。

このような国際的背景のもとにスコットランド問題は複雑怪奇な様相を呈していた。スコットランドの女王 Mary Stuart はフランスの皇太子フランソワの妃であった。彼女は生まれるとすぐ即位したので、母のマリー<sup>23)</sup>が摂政になったが、1559年王室と対立する貴族たちがカルヴァンの教えを受けて帰国した John Knox の指導の下に蜂起した。摂政がフランスの援兵を得て弾圧を計ると、ノックスはエリザベスに援助を求めた。しかし、イギリスはスペインの出兵を懸念してか容易に決断がつかず、実際に派兵したのは1560年3月末になってのことだった。フランスも国内に宗教的内乱の兆しが現われ、摂政マリーが死ぬとエディンバラ条約を締結し、スコットランドから撤退した。こうしてスコットランドはカルヴィニズムが支配し、ノックスの後継者 Andrew Melville により長老制度が確立された。

メアリは夫フランソワ二世と死別し1562年帰国したが、やがて再婚問題が華やかに取り沙汰されるようになった。美貌の彼女にはスペインの王子 Don Carlos を始め多くの求婚者が現われたが、結局1565年カトリック教徒の Henry Stewart, Lord Darnley と結婚した。彼は愚鈍な男で、やがて暗殺される。女王の愛人 James Hepburn, Earl of Bothwell が犯人だという専らの噂であった。この結婚は単に失敗であったというだけでなく、メアリとエリザベスの間に感情的亀裂を生じた。ドン・カルロスとの縁談が不調に終わったのは、スペインの勢力がスコットランドに及ぶのを恐れたエリザベスの反対によるものだった。彼女は自分の寵臣 Robert Dudley, Earl of Leicester を推薦したが、メアリはこれを断った。更に重大なのはイギリスの王位継承権の問題である。メアリはヘンリ七世の娘マーガレットの孫に当り、ダーンリ伯もマーガレットの二度目の夫アングス伯の孫にあたるどころから、メアリのイギリス王位継承権がこの結婚により非常に強くなったと言える。

さて、メアリは夫殺しの嫌疑濃厚なボズウエル伯と再婚し、スコットランド全土の非難を浴びた。反乱が起きるとボズウエルは逃亡し、メアリは貴族たちの手に捕えられた。こうして1567年まだ赤ん坊だった王子ジェイムズ（六世。後の英国王ジェイムズ一世）に位を譲り、孤城に幽閉されてしまった。しかし翌年城を脱出し、ボズウエル伯と合流して兵を挙げたものの再び破れて、エリザベスに保護を求めた。エリザベスは事の理非を明らかにしようと調査委員会を設けたが、政治的配慮から曖昧な結論で終止符を打ち、メア리를カーライル城やフォザリナー城に閉じ込めた。

メアリの不倫はカトリック教徒も非難したが、やがて旧教の反宗教改革運動にその価値を見直されるようになった。しかも、何しろイギリス王位請求権を正当に所有する美女なのである。宗教問題を離れても魅力があった。間もなく Thomas Howard, Duke of Norfolk との間に縁談が起った。彼は当時イギリスで唯一の公爵だった。だが、エリザベスの側近で最も力があつたのは前述のバーリ公とレスタ伯である。特にバーリ公セシルは女王の信任が最も篤く、そのため枢

密院の議官たちの嫉妬をかっていた。彼らは、セシルに替わる新勢力の誕生としてこの縁談を積極的に支持し、レスタ公も賛意を表明していた。しかし軍配はセシルに上がり、エリザベスは厳しくノーファク公を叱責した。彼は一度所領のノーファク州に帰るが、やがてロンドン塔に捕われの身となる。

一方、北部では Earl of Northumberland や Westmorland を首領とする反乱軍がメアリ救出に向うなど騒ぎが絶えなかった。1570年2月ローマ教皇ピウス五世はエリザベスを破門し、かつ廃位する旨宣言した。同じ頃 Ridolfi の陰謀がありノーファク公もこれに加わったが、結局セシルに機先を制せられ、叛乱は不発のうちにノーファク公の死刑で幕を閉じた。

1572年イギリスとフランスの間にブロワ条約と呼ばれる軍事同盟が成立した。仮想敵国は勿論スペインである。イギリスの外交政策は実を結んだ。1573年から78年までの五年間はエリザベス朝で最も平静な時期となった。勿論外部情勢もイギリスに味方していた。フランスでは1572年8月24日聖バルトロマイ祭の虐殺事件が起り、宗教戦争が再燃した。オランダでもスペインの支配から逃れようと叛乱が相次ぎ、スペインはこの鎮圧に精力の相当部分を割かねばならなかった。1573年4月オランダ総督アルバ公との交渉が纏まり、イギリス・フランドル間の通商が復活した。

一方、スペイン王フェリペ二世の勢力はますます膨脹の一路を辿っていた。1580年ポルトガルの王位を手に入れ、オランダでも叛乱軍を壊滅寸前にまで追い込んだ。フランスではアンリ三世がカトリックのリーグに対し完全に屈服していた。そしてイギリスでは、1583年カトリック教徒 Francis Throckmorton がメアリと通じてフランス軍をイギリスに上陸させようとしたが失敗し、次いで1586年バズィングトン事件が起った。もとメアリの小姓だった Anthony Babington という男がカトリック勢力を背景にエリザベスの暗殺を図り、失敗する。しかし、今度はメアリも事件の主役として処刑されてしまった<sup>24)</sup>。これを聞いたフェリペ二世は激怒した。

スペイン戦争の勃発は1585年である。この戦いは国益の争いと同時に宗教戦争でもあった。宗教は国益に密着しており、国民の生活を支配していたとも言える。シェイクスピアは自分の政治的宗教的立場を鮮明にすることを避けた<sup>25)</sup>。だからエリザベスをモデルにしても、決して露骨にそれとわかるような取り上げ方はしなかった。しかし、国民が関心を持ちよく覚えている出来事は抜け目なく取り入れた。そうすることにより、芝居がよりうけるのだ。例えば「ハムレット」の一幕一場で Marcellus が Why this same strict and most observant watch So nightly toils the subject of the land, And why such daily cast of brazen cannon, And foreign mart for implements of war; Why such impress of shipwrights, whose sore task Does not divide the Sunday from the week; What might be toward, that this sweaty haste Doth make the night joint-labourer with the day… という科白がある。「ハムレット」が書かれたのは1601～2年と推定されるが、スペインの無敵艦隊がカレー沖夜戦と翌日のグラールヴィンの海

戦でイギリス艦隊に破れたのは1588年7月28～9日のことであった。その後第二回の遠征があるという噂が流れ、事実1596年10月百隻余りの艦隊がリスボンを出港したが、間もなくフィニステル岬で強風に会いそれ以上進むことが出来ず、遠征は挫折した。翌97年にも同じ噂がイギリス人を脅かしたので、エセックス伯は逆に先制攻撃を仕掛けたが途中逆風に遇って失敗、第三次無敵艦隊は錨を上げてイギリスに向った。しかし、フランスの北西岸沖で強風のため大打撃を受け、退却を余儀なくされた。シェイクスピアはマーセラスの科白を書くとき、当然この事実を頭に描いていただろう。

シェイクスピアが適当な話題を芝居に盛り込む遣り方に二通りある。一つは、今まで述べてきたように、現実の出来事を役者の科白から観客が連想するようにする—例えば *double entendre* である。「ハムレット」では猥褻な意味に取れる言葉がしばしば出てくる。もう一つは芝居の枠組みに利用する方法である。「リア王」では宗教問題をこれに使った形跡が見られる。

この劇には二つの勢力がある。それも善玉と悪玉にはっきり別れる。つまり前者はコーディーリアを始め、Kent, エドガーといった *natural* な人物、後者はゴネリル, リーガン, エドモンドという *unnatural* な人物である。そして中間に Albany, Cornwall, Fool などを配して全体のバランスを取っている。コーンウォールはリーガンに引き摺られて悪事に加担し、オルバニーは善良な人柄を窺わせているだけに、一体何をしているのかと観客に歯痒い思いをたっぷり味わせた後で、遅滞きながら正義を行う。無力な道化は雄弁にしかも正確に事態の解説を行う。

この登場人物の配分は流石であり、それだけでも観衆の興味を逃さない。だが、この二派の行動律になっているのはコーディーリアとエドモンドに代表される二つの道德観である。一方、観衆は国教派とカトリック教徒である<sup>26)</sup>。そう考えてくると、シェイクスピアは実によく観衆の心理を掴んでいた。つまり両派とも自分たちが善玉と一体なのだという錯覚に陥ることを計算し、さんざ苦労して最後に勝利を手中に納めるのは自分たちだという満足感に浸るであろう、と読んでいる。国教派はリアに晩年のエリザベスを感じ、カトリックはコーディーリアに若きメアリの面影を偲ぶ。だから「リア王」は立場の相反するどちらの側から見ても納得の行く勧善懲悪劇だったといえる。

加うるに、現代から見ればエドモンドの論理には一理ある。退屈な閨で無気力に造った嫡子よりも、人目を忍んで愛し合って造った庶子の方が真に愛情の産物と言えよう。しかし、人間の価値に関する近代思想はエリザベス朝やジェイムズ朝の社会にはまだ受け入れられなかった。だから、この善悪の判断基準は当時の芝居の約束事と言ってよい。しかし悪の論理には悪魔的魅力があり、これは古今東西を問わず人間の複雑な心理の中に巣くう快樂の虫を満足させる。その意味でエドモンドという登場人物は傑作なのだ。更に宗教闘争の見地からすれば、この悪玉が奸智に走れば走るほど善玉すなわち観衆は、国教派にせよカトリックにせよ、自分たちの敵が手強いこ

とを確認し、悲壮感に浸ることが出来るのである。

次に経済問題に触れておきたい。エリザベス朝は確かに欧州の二流国であったイギリスを一流国に引き上げ、英国史に栄光の頁を残すものである。しかし、それに比例して国民の生活が豊かになった訳ではない。何しろ、新興国イングランドを取り巻く状況には厳しいものがあつた。

1543年320万だった人口は1603年には380万に脹れ上がったが、これは十年あたりの成長率でほぼ3%になる<sup>27)</sup>。つまり、ペストで大量の死者を出してもなお、バラ戦争や百年戦争の頃に比べ、急速に人口が増加していたのである。だが、その割には耕地面積が増えなかった。毛織物や皮革工業は羊や馬を飼うためより多くの土地を必要としたし、王侯貴族は龐大な狩猟地を保持していた。そのため、十六世紀の始めと比較して、1560年代は小麦が二倍半、大麦が二倍、90年代では四倍半と四倍にそれぞれ価格が騰貴していた。そのような背景の下に対フランス戦争、対スペイン戦争、更にはアイルランド出兵などを経験したのだ。女王の特許を得て軍事関連産業を興した企業家たちは大いに潤ったが、一般庶民の生活はかなり窮乏していた。しかも、1594年から5年間続いた天候不良が飢饉をもたらし、食料品価格の暴騰を招いた。その頃暴動が頻発しているが、これは飢餓と戦争への不満が原因であつた。政府は数回にわたり穀物が適正価格で市場に出回るよう指示する命令を出したり、1596年には無税で穀物を輸入させるなど救済策を講じたが、あまり効き目はなかつた。97年の第九議会では経済・社会立法がいくつか行われ、農民の耕作地維持や貧民の救済と悪質な浮浪人の取締りなどを決めているところを見ると、実情はかなりひどかつたようだ。働き手を兵隊に取られ、一家が路頭に迷うという悲惨な出来事も珍しくはなかつた。したがって、世の中の仕組みから生ずる悲劇という芝居は大衆にとりカタルシスの役目を果たした。

また、当時の社会では庶民だけでなく、一般に貴族が衰退しジェントリーが抬頭しつつあつた。同じジェントリーでも農村ジェントリーは落ちぶれ、宮廷ジェントリーが勢力を増していた<sup>28)</sup>。

*Fool.* Prithce, nuncle, tell me whether a madman be a gentleman or a yeoman?

*Lear.* A king!

*Fool.* No. he's a yeoman that has a gentleman to his son; for he's a mad yeoman that sees his son a gentleman before him. (III, vi, 10~5)

そして世を風靡していたのが Mammonism (拝金主義) である。これは我が国の元禄時代とは違い、上下の差別という社会秩序の基盤が崩れ始めており、むしろ室町時代末期の姿に似ている。こうした時代には、逆に門地や身分に基く秩序に世の郷愁が集まるものである。シェイクスピアはこの風潮を見逃さなかつた<sup>29)</sup>。*Troilus and Cressida* にせよ *Macbeth* にせよ、この考え方が大前提をなしている。同時に叛逆の動機は、当時の社会人には極めて容易に理解出来た。

このような一般的理解の上立って、利害相反する国教派とカトリック教徒がそれぞれ自分の気に入るように解釈し、満足出来たのがシェイクスピアの芝居である。特にカトリック教徒は、コーディーリアにスコットランドの女王メアリの面影を偲び見ることが出来た。フランス王妃、国外追放、挙兵、敗戦、処刑、脈絡が取れなくても、イメージは十分である。しかも、シェイクスピアは決定的証拠を何も残さない。コーディーリアがメアリでないと反論することは容易なのだ。

以上の理由により、コーディーリアはどうしても殺されなくてはならなかった。リアはほぼ天寿を全うしたと言えないことはないが、彼女の夭折—それも非業の死—は何といっても残酷である。だが、これが当時の観客にはうけた。シェイクスピアが「原リア」の筋を変えて悲劇にした由縁はここにある。だから、時代が変るとこの芝居は上演されなくなった。後に続く Tourneur, Webster, Ford, Middleton などによる悲劇が陰湿残忍さを窮めていたせいもあって、悲劇そのものの人気落ちたことにも原因があったのであろうが、後年 Nahum Tate が改作したハッピー・エンド劇に取って替わられてしまった。原作が再び上演されるようになったのは、1838年 Macready の演出以降のことである。 (つづく)

#### 注

- 1) 福田恒存「リア王—批評集」シェイクスピア全集12, 新潮社。なおトルストイはシェイクスピアが嫌いだったといわれている。
- 2) 日本でも河原者と呼ばれていた。
- 3) 1591年ストレインジ卿一座（後の宮内大臣一座）がバラ座で「ハリー六世」（ヘンリー六世第一部）を上演したとき、シェイクスピアが報酬として£ 3. 16 s. 8 d. 受取った旨 *Henslowe's Diary* に記録がある。ストレインジ卿一座は女王一座の演目のいくつかを買い取っていたのだ。(F. E. Halliday: *Shakespeare and His World*, 小津次郎訳「図説シェイクスピアの世界」学習研究社, 参照) 詩人としてのシェイクスピア評は Francis Meres: *Palladis Tamia, A Comparative Discourse of our English poets with the Greek, Latin, and Italian poets* (1598) に載っている。
- 4) 女王一座の後身らしい。
- 5) cf. *Hamlet*, II, ii, 353~79
- 6) Phillip Henslowe はロンドンでバラ座、運命座などいくつかの劇場を所有していて、彼が残した1552年から1602年までの会計帳簿はエリザベス朝演劇の実態を知る貴重な手掛りになっている。
- 7) G. B. Harrison: *Introducing Shakespeare*, Chapt. 2, p. 53. (Pelican)
- 8) シェイクスピア劇の出版は1594年の *Titus Andronicus* が最初といわれる。
- 9) 福田恒存「リア王解題」シェイクスピア全集12, 新潮社。
- 10) *Introducing Shakespeare*, Chapt. 7 *The Shakespeare Canon*, pp. 161~4.
- 11) *King Lear*, I, ii, 112~21.
- 12) *Ibid.*, I, ii, 152~63
- 13) 「原リア」には嵐の場面がない。
- 14) *K. L.*, IV, vi, 11~24.
- 15) *Sonnets*, 12.
- 16) Peter Quennell: *A History of English Literature*, Chapt. 4 *The Elizabethan Age*, Shakespe-

arian Heyday, p. 54. (Merriam)

- 17) 老年病診療 *Questions and Answers*. 六法出版。
- 18) 植村雅彦「エリザベスとその時代—イギリスの夜明け—」創元社。
- 19) なかんずく1597年 *The Isle of Dogs*, 1605年 *Eastward Ho* の内容が不穏かつ誹謗的だという廉により逮捕されたことは、シェイクスピアの記憶に生々しかった。
- 20) これはエリザベス女王に捧げられた詩である。
- 21) John Floris の英訳がある。彼は Lord Southampton's Private Circle のメンバーでもあった。
- 22) ヘンリ八世は生涯に六人の妻を持ったが、最初の妻キャサリンは兄アーサー（1502年没）の寡婦であったのを、教皇ユリウス二世から教会法規よりの特免を得て、結婚したのである。キャサリンはスペイン王フェルディナンドの娘で、カルロス一世は甥にあたる。1527年イギリスがフランスと同盟したとき、ヘンリ八世との結婚はその政治的意味を失ったが、教皇はカール五世の圧力でヘンリ八世の提訴した離婚問題を決めることが出来なかった。（大野真弓「イギリス史（新版）」山川出版社）
- 23) フランスのカトリック教徒の指導者ギーズ公の妹。
- 24) エリザベスは例により事を曖昧に処理しようとしたらしい。しかし死刑執行令状が女王に内緒で送付され、後でこのことを知った彼女は激怒して責任者を処罰したという。事実ならば「リア王」五幕三場、コーディーリアの処刑の経緯に酷似した話だ。
- 25) 当時の劇作家には社会の改善に役立とうとする使命感のようなものは見当たらない。ジョンソンの場合でも諷刺が効き過ぎて当局の忌諱に触れたが、別に反体制であったわけではない。これに反し散文作家はしばしば悲劇的運命に見舞われる。例えば Thomas More や John Wycliff や Walter Raleigh のように非業の死をとげた者が少なくない。しかしモアは政治家であり、ウイクリフは聖職者だったので、自分の理念や立場を明確にしなければならなかったのかも知れない。
- 26) 清教徒は芝居が嫌い、芸能を罪悪視していた。1642年清教徒革命が始まると、観劇は一種の社会悪であるとして、劇場を閉鎖した。劇場が再開されたのは1660年王政復古の時である。
- 27) 「エリザベスとその時代」参照。この数字は J. C. ラッセルという人の推定である。なお当時はイギリスのみならず、ヨーロッパ全般にわたり人口増加率が大きくなっていった。
- 28) シェイクスピアの父ジョンは1596年ジェントリーに加えられ、紋章の使用が許されたが、これは息子の名声と金力によるものであった。勿論、この地位はウイリアムが相続した。
- 29) シェイクスピアの文章には経済用語が多い。